

## 卒業論文の思い出

\* 表題はすべて卒業論文の題目で

統一した。

### 〈森鷗外の歴史小説〉

第一回卒業 尾島 光子

卒業してから四年目なのです。卒論のことなど言われても思い出というものに化して、とは言うものの学生ならば卒論を書かねばならない年なので頑張らなくてはと手紙に書いたことを思い起しました。

聴講に通っていた頃後輩の卒論を拝見しましたが、内容は勿論年々向上しているのだと思いますが、テーマにしても製本にしても知恵が付いたな？（？）と言う感じがして、三日坊主で終わってしまいました。が妙に張り切り切られました。後輩の話を聞いていると随分と早くから資料集めをしているようですが、私などは本を読んでいてもこれがどうなっているのか見当もつかないものではなかつたかと覚えています。

都合上全集が必要になり、どうしても欲しくなったのですが何しろ高価すぎて手が出ませんでした。当時の日記を見ると十一万円だ

ったようです。漱石は種々出ているのに何故鷗外が出ないのか、地団太踏みました。昭和二十六年以後出ていないし、明治百年とかで明治文豪の展示会などもあちこちで催されてもいたのでもうこの辺で次の全集が出てもいい頃だと思ひ岩波の新刊案内を楽しみにしていたのですが駄目でした。どうしても欲しいのなら買ってもいいとは言われたものの責任が重たいし、思い余って片桐先生に色々理由を付けて訴え出しました。全くそんな感じだったかと思ひます。

鷗外は官吏であり小説家としても名を上げた。失礼な語であるが、明治精神に満ちた行動のある反面現代のサイドビジネスのことを考えるとその方の先駆者ではなかったかと改めて思い起しました。鷗外は還暦で亡くなったことになりましたが、遺言により森林太郎墓とだけ書かれた墓は三鷹禅林寺にあり、偶然なのだろうが斜め向いが太宰治の墓で、時代も精神も違い過ぎたかも知れないが語り合っていたならばどんなであろうかと思はれお邪魔してしまいました。鷗外ほど身内の人々にその作家について語られている人は少ないのではないのでしょうか。それらによれば大変な子煩悩で愛情濃やかな父親であり、決して頑固な人ではなかつた様で、作家活動においては理想的人間像を追い求め続け、穏やかに生涯を閉じた人ではないかと私には段々と定着してしまつた様でした。身内の語ることなので色々問題はありますが、小堀杏奴さんのお話を伺つた時も心温まる思いがして写真をながめたものでした。

就職してから新たな勉強が始まり今では本棚の様子も変わりました。少し前までは学生の試験問題を聞いても何とかまとめられたのではないかと思うと情けなくなつてしまいます。何が忙しいと言う

のか、悲しいかな小説も長編は面倒臭い次第です。卒論は永久貸し出し可能とかで早速手続きを取り製本に出しました。書き終った当座はこうも、ああもと気がかりであったのに、製本が出来上ったときは気恥ずかしくなって今ではカバリーをしてあります。今でも古本屋へ行きますが鷗外を捜している学生に逢うと話を聞いて見たくなります。講演会に出かけることもあります。全集もやっと出版されましたが今はそちらに目を向ける余裕もなく図書館でながめています。テーマにそつて本を読むことは生活の中では中々出来ないことだらうし、まして原稿用紙に字を埋めることとなると益々出来ません。この機会に卒論と学生生活とそして片桐先生が改めて思い出され、本を読まねばと力んでいる次第です。

## 〈漱石の女性論〉

第一回卒業 岡崎 智子

卒論とは懐かしいことばである。ほんの少しの満足感と、かなりの後悔の念を沸きたたせながら、学生時代を思い出させてくれる。ところで、私の卒業論文は、「漱石の女性論」という題目であった。

高校時代から夏目漱石に魅せられ、それがもとで国文学科に入学したのであるから、漱石を選ぶことに何の迷いもなかった。その上いつの頃からか、歴史上の女性を初めとして、女性に対する興味を強くいだいていたので、漱石の作品の中に登場する女性について考えてみようということも、さほど時をかけずに決まったように覚え

ている。とはいえ、漱石と女性を、どう結びつけるかには、かなりの時を費やした。

漱石が小説家となった後に書いた一連の小説は、それぞれ 独立したテーマを持つ一つの作品であるが、同時に、各作品は互いに強い関連を持つている。その上、テーマの変遷、深まりが、全て、恋人、或いは夫婦といった、男女間に展開されていることを考えると、女性像の変遷という観点からも、作品を捉えることができるのではないかと考えられた。こうして、卒業論文の内容の目やすは決まった。

何とかテーマを決め、何度も作品を読み返し、資料作成をしながら、参考書を捜しに古本屋や図書館を歩き回ったものの、人が手につけていないものを選んだのであるから、目立つものがある訳はなく、悪戦苦闘しながらも、どうにか縮切りぎりぎりに、百余枚の論文を書きあげた。

今にして思えば、自分の力量も知らず、ずいぶんと生意気だったとは思うが、それ迄の研究者が、余り触れていない分野をと、意気込みは素晴らしいものであった。だが、卒論ということばを聞くと、多少、後めたい気持ちになる所以は、このあたりにあるのではないだろうか。

その後、漱石の女性論を特集した書籍、雑誌などが、多数眼についてならないが、買求めるだけで、棚に眠っている。忙しきにかまけて、読む時間がないとも言えるが、最大の理由は、我が卒業論文の、浅薄であることを悟らされるのがこわいのである。

そうは思っても、卒論とは、やはり愛着が強く湧くものなのであろう。私は、漱石とその女性像という問題を、じっくりと時間をか